感動詞

【五七〇】 感動詞わ、語、句、文の上につかうがあり、中につかい、又下につかうものがある、下につかうものわ、別けて、助詞の中え入れた、理にわ合わぬようだけれども、先わ、こうした。

感動詞わ、文の骨組の中に這入らぬものであるから、外の品詞とわ、大きに趣がちがう、おもな感動詞を、意味に因て、次のようにも分けられる。

【五七二】……【六〇一】 泛く感動するに發する聲、

「あゝ」

あゝ‖おかしい。あゝ‖うれしい。あゝ‖でかした。あゝ‖落ちそうだ。あゝ‖くたびれた。あゝ‖もうかなわぬ。

「え」「えい」「えゝ」

え‖くれてやれ。えい‖いま〳〵しい。えゝ‖口惜しい。

「えゝ」

えゝ‖それからして、えゝ‖何とか言つた。

「もう」

もう困つてしまいました。それわもうえらいものさ。いやもうひどい目にあつた。いやもう驚きました。

○「もうすこし」「もう一つ」「もう濟みました」など云う副詞とわちがう。

「はや」

なんだかはやわかりませぬ。どうもはや困まりました。なんともはや申上げようがござりませぬ。

○驚いた時、氣の引き立つた時に發する聲、

「あ」

あしまつた。あ忘れた。あそうだつた。

「あつぱれ」

あつぱれでかした。あつぱれ美事だ。

「あら」多くわ女に用いられる。

あらおめずらしい。あらひどい。

「あれ」

あれまた來た。あれどうしよう。

「あれ」

あれまた來た。　あれどうしよう。

「いや」「いやあ」

いやそれで思い出した。　いや久しぶりで。　いや皆さんおいで、　いやとんだことになりました。　いやもうえらい目にあいました。　いやあすばらしい。　いやあ感心な事だ。　いやあ奇妙〳〵。

○副詞の「否（いや）」とわちがう。

「いよう」

いようえらいものだ。　いようお手柄〳〵。

「え」「えゝ」

えあの人が死んだと。　えこれは大變。　えゝ大病ですと。

「おう」

おう痛い。　おう寒い。　おうそうだつた。

「おや」「おや〳〵」　多く女に用いられる。

おやおかしい。　おやどうしたろう。　おやあなたお久しぶりで、　おやおや不思議だ。　おや〳〵仕方がないねえ。

「さて」「さて〳〵」

さて困まりました。さて〳〵感じ入つた。

「はて」

はて善く詠んだ。はて分りました。はて困まつたことだ。

「ほい」

ほい落した。ほい忘れた。

「まあ」「まあ〳〵」多く女に用いられる。

まあほんとうにうつくしいこと。まあまあきれた。まあおどろきました。

まあ〳〵よくいらつしやいました。

○「まあ(まず)よかろう」まあ〳〵(まず〳〵)お待ちなさい」など云う副詞とわちがう。

「や」「やあ」「いや」いやあ」の約まつたものであろう。

やとんだことをした。やこいつしまつた。やあしくじつた。やあ出て來た。やあ久しくお目にかゝりませぬでした。

狂言記、見物左衛門、やあ、身共にあうて、笠を取らせらるゝは、どなたぢや。」

やあ、大勢人の寄つて居るは、何事でござるぞ。」やあ、子供が相撲をとる。

狂言記、見物左衞門、やあ、身共にあうて、笠を取らせらるゝは、どなたぢや。」

やあ、大勢人の寄つて居るは、何事でござるぞ。」やあ、子供が相撲をとる。「やれ」「やれ〳〵」

やれよかつた。やれうれしや。やれ東だのやれ西だのと、やれ〳〵たびれた。やれ〳〵氣の毒な事だ。

狂言記、素襖落、やれ〳〵、それは目出たい事ぢや。

醒睡笑、一、やれおれぢや、やれ見忘れたか。

日本永代藏、二、天狗は家名の水車、やれ〳〵、よい事を思ひ出してゐたから忘れたは。

「よう〳〵」「いよう」の約まつたもの、

「あれ」「あれ〳〵」

ようよう〳〵うまいものだ。ようよう〳〵えらいお手柄、

あれ見な。あれ〳〵ごらんなさい。

○氣の付く時、氣を付ける時に發する聲、

「おい」

おい受けた。おい來た。おいこれはとんだ粗匆

【五七二】……【六〇一】感動詞　さて……おい

「おつと」

おつとあぶない。おつとちがつた。おつと待つた。

「さあ」「さあ〳〵」

さあ歸ろう。さあ大變だ。さあそれわ、さあ〳〵おあるきなさい。

狂言記、連歌毘沙門、夫れならば參らう、さあ〳〵ござれ〳〵。

「そら」

そら出た。そらこゝにある。

「それ」「それ〳〵」

それ見たがよい。それ久しいあとの事、それくれてやる。それ〳〵お

まえも知つて居るとうり、

「ちよいと」

ちよいとあなた、ごらんなさい。ちよいと、こゝにございます。

「どつこい」

どつこいそうわさせぬ。どつこいこつちだ。

「どれ」「どりや」

どれ行こう。どれ讀んでみよう。どりや取掛ろう。

「なんと」

なんとこれは妙だろう。

「ほら」

ほら來た。ほら出た。

○物言いかけて強くたしかめるに發する聲、

「あゝ」

あゝこれ〳〵待ちな。

「あの」

あの昨日便があつたか。

「え」

えあなた、お歸りなさいますか。

「さ」

これが、さ、例の物だよ。あの人が、さ、そう云つたよ。それについて、さ、話がある。これさ、待ちなよ。あれさおやめよ。

【五七二】……【六〇一】感動詞　おつと……さ

○助詞の「三五九、」接尾辭の「六一四」にも「さ」がある。

「な」「なあ」

なあなた、なあおまえ、そうでわないか。

「ね」「ねえ」

ねあなた、ねえそうでしょう。

○心に受け入れた意を云うに發する聲、

「あゝ」

あゝそうでしたねえ。

「おう」

おうさようく、

狂言記、烏帽子折、おう、これは映え合うてよかろ。

「なるほど」

なるほどそうだ。

「はあ」「はゝあ」

はあそうですか。はあそうかね。はゝあ御尤なお話、

「ふん」「ふゝん」

「ふん」「ふゝん」

ふんそうか。ふゝん道理で、

「へえゝ」「へゝえ」

へえゝ至極尤なこと、へゝえ妙ですな。

○承知する意に發する聲、

「は」「はい」「はあ」

三太夫さようか　は、はいその通りでござります。」これわおまえの物だろうな、はあ、はあそうです。

「へい」

きつと言付けるぞ。へい、へいかしこまりました。

「あい」「あゝ」

梅子や見たか。あい、あいそうだよ。」おまえひとりか。あゝ、」あゝそれでよろしい。

「えゝ」

もう歸るか。えゝ、」えゝきつと行くよ。

【五七二】……【六〇一】感動詞　な……えゝ

「おう」
たのむぞ。おう、」おう引受けた。
「うん」
これば かりか。うん、」うんそうだ。
○承知せぬ意にて發する聲、
「いえ」「いゝえ」
もう濟んだか。いえ、」いえまだ參りませぬ。」くたびれたろう。いゝえ、」
いゝえ何も存じませぬ。
「いや」「いゝや」
これであろう。いや、」いやそうでわない。」よわつたか。いゝや、」いゝ
や嘘だろう。
「なに」「なあに」「なんの」
閉口したか。なあに、」なに負けるものか。」なんのそのくらいなこと。
○疑い怪しむ意に發する聲、
「はて」

はて無いことわない筈だが。はて怪しい。はてどうしたろう。はて知

はて無いことわない筈だが。はて怪しい。はてどうしたろう。はて知らぬ事だ。

「ふん」「ふゝん」

ふん怪しい。ふゝん不思議だ。

○押しのける意に發する聲、

「へん」

へんとんだ氣休めだ。へんおまえに出來るものか。

○人を呼びかけるに發する聲、

「おい」「おうい」

おいそこえ行く人、おうい車屋、

「こう」

こう聞きな。こう見てくれ。

「こら」「こら〳〵」

こら待て。こら〳〵何をして居る。

「これ」「これ〳〵」

【五七二】…【六〇一】感動詞　おう…これ

これやめろ。これ〳〵しつかりしろ。

「もし」「もし〳〵」

もしあなた、もしこちらでございます。もし〳〵待つてください。

狂言記、栗焼、申し、よい事がございまする。同、連歌毘沙門、あゝ申し申し、なぜにそなたばかり取らせらるゝ。

「やあ」

やあどこえ行く。

「やい」「やい〳〵」

やい待て。やい〳〵何をする。

狂言記、相合袴　やい、冠者、行て呼びましてこいや。同、三人夫、やい〳〵此土器を下さるゝ、急いで頂戴いたせ。

○呼ぶに答える聲、

「は」「はい」「はあ」「へい」

「あい」「おう」「おい」

○戒めとめる聲、

「しい」「しつ」

○いま〳〵しく思つて舌打する聲、

「ちよつ」

○感動詞わ、同じ聲で、意味と用法とのちがうものが多いから、よく氣を付けるがよい、助詞、其外にも、同じ音のものもあるが、感動詞わ、多くわ、語の上に附くものであるから、迷うことわ少ない。

感動詞を重ねて、「あい〳〵」「あらまあ」「あれ〳〵」「いや〳〵」「いやはや」「おい〳〵」「う〳〵」「おや〳〵」「おやまあ」「こら〳〵」「これ〳〵」「さあ〳〵」「さて〳〵」「なるほどなるほど」「はい〳〵」「はてな」「へい〳〵」「まあ〳〵」「もし〳〵」「やあ〳〵」「やれまあ」「やれ〳〵」「など〳〵」つかうのわ、意味を強くするのである。

「あれ、お聞きなさい。」「さて、困つたものだ。」「それ、おまえも知つて居る通り、」「ちよいと、御覽なさい。」「なに、負けわしない。」「なんと、是れわ妙だろう。」「なんの、そのくらいなこと、」「などわ、外の語を、感動詞に用いるので、又「おつと來た、」「これわしたり、」「これわどうも、」「など、外の句を、感動詞の意に用いることもある。

詞の組立

この章でわ、接頭辭と接尾辭との事を云う。

【六〇三】 意味があつて、獨立せず、外の語の頭に附けて、熟語にするばかりに用いられるものが、接頭辭である、但し、妄にどの語にも附けられぬ、用い馴れがある、先、次に、その重なものを記そう。

○敬つて云い、丁寧に云い、又わ、言葉をうつくしく云うに用いるもの。

【六〇五】「お」（御）

お年、お名前、お陰、お釋迦さま、お兄さま、お役、お宅、お天氣、お帽子、お菓子、お丈夫、お使、お笑い、お考え、お正月、お江戸、お氣の毒、お美事、お幾つ、お初、お久し振、お近い、お早い、お宜しい、お羨ましい、おめづらしい、お早く、おめでとう、お早々と、お寒かろう、おせわしかろう、おさつぱり、おあいにく、おかたじけ、

○「お」わ「おほ」(大)の約まつたもので、源氏物語の若紫に、「おとゞ(御殿)の造りさ

ま、同、玉葛に、「これはおまへ(御前)にまゐらせ給へ。」などゝある。「おほ」に、次項の「み」がついて、「おほみ國」など云い、「み」が「ん」となつて、「おほん寶」など云い、それを約めて、「あのおん方」おん大將」おんの字付き」なども云うが、多くわ用いられぬ。

平家物語、一、二代の后の事、　先帝のむかしもや、御戀しうおぼしめされけむ。　同、一、殿下の乘りあひ、　攝政關白の、かゝる御めにあはせ給ふ事は、いまだうけたまはりおよばず。

著聞集、八、　此御目出たさをば、いかゞおぼしめす。

狂言記、鬼の槌、　いや、又おしをらしい事でござる。　同、栗燒、　其栗を、云々、

銀の鉢かなどに入れて、御座敷へ出させられたならば、云々、一同に御褒めなされ。

醒睡笑、八、　こなたのお仕合せは、殘る事なし、何事もおめでたい。

吾吟我集、六、　文ならで、逢ていはじや、おゆかしく、おもひまいらせ、そろと計を。

「み」(御)

【六〇三】【六〇五】接頭辭　おみ

み‖位、み‖代、み‖國、み‖輿、み‖堂、

「おみ」「おみお」前の二つを重ねたもの、

お‖み‖帶、お‖み‖足、お‖み‖輿、お‖み‖堂、お‖み‖酒、お‖み‖袷、お‖み‖闕、

お‖み‖大きい、

お‖みお‖膳、お‖みお‖盆、お‖みお‖汁、お‖みお‖腹、

【六〇六】「ご」（御）

ご‖說、ご‖用、ご‖返禮、ご‖挨拶、ご‖勉强、ご‖遠慮、ご‖丁寧、ご‖深切、ご‖丈夫、ご‖近處、ご‖當主、ご‖不用心、ご‖存じ、ご‖ゆるりと、ご‖さかんに、「御意」「御慶」「御寢」などわ、成語と見る。

狂言記、瓜盜人、私は、瓜盜人ではござりませぬ、道に踏迷うて參つてござる、眞平御ゆるされませい。

○「まことの」と云う意を云うもの、

「ま」「まん」「まつ」（眞）

ま‖顏、ま‖東、ま‖晝、ま‖夜中、

まん中、まん南、まん圓、
まつ白、まつ暗、まつさかさま、まつ正面、まつ最中、
平家物語、四、競の事、日ごろは、しぜんの事も候はゞ、まつさきかけて、いのちを奉らう、とこそ存ぜしかど、
○「ちいさい」「低い」「弱い」など云う意のもの、

「こ」（小）

こ山、こ松、こ男、こ舟、こ包、こ本（ほん）、こ道具、こ役人、
こ一里、こ百圓、
こ高い、こ早い、こばしこい、こざかしい、
こ綺麗、こざつぱり、こ躍りする、
○「始めて」「の」の意のもの、

「はつ」（初）

はつ雪、はつ夢、はつ午、はつ物、はつ鰹、はつ日の出、はつ旅、は
つ舞臺、
○數を重ねる意、又わ、不定の數を云うもの、

「いく」（幾）

‖いく度、‖いく月、‖いく日、‖いく人、‖いく千、‖いく里、

‖いく久しく、

「生紙」生‖絲」素‖顏」素‖足」初（うい）‖孫」初‖産」取‖卷く」差‖扣える」立‖優る」打‖解ける」相‖濟む」など

もあるが、應用に限りがあるから、成語と見る。

○打消す意のもの、

「ふ」「ぶ」（不）

‖ふ似合、‖ふ行屆、‖ふ孝、‖ふ法、‖ふ信心、‖ふ便利、‖ふ自由、‖ふ承知、‖ふ相應、

‖ぶ用心、‖ぶ意氣、‖ぶ器用、

○「好くない」わるい」の意のもの、

「ふ」「ぶ」（不）

‖ふ取締、‖ふ手際、‖ふ心得、‖ふ運、‖ふ行跡、‖ふ器量、‖ふ首尾、

‖ぶ躾（しつけ）、‖ぶ男、‖ぶ作法、‖ぶ樣（ざま）、

○「無い」と云う意のもの、

「む」「ぶ」（無）

む學、む藝、む用、む益、む欲、む實、む慈悲、む分別、む差別、む證據、む利息、む手數料、

ぶ禮、ぶ勢、ぶ遠慮、ぶ沙汰、ぶ愛相、

順番を云う「第一」「第五」「第十」「數あるを云う「諸藝」「諸國」「諸先生」「諸役所」「數十」「數年」「數度」「數箇條」「衆評」「衆議」「萬事」「萬國」「この」「その」「今の」の意を云う「當家」「當地」「當人」「當年」「當六月」「もとの」「まことの」の意を云う「本家」「本國」「本山」「本店」「本名」「本物」などもある。

【六〇七】外の語の下に附けて、熟語とするばかりに用いられるものが、接尾辭である、是れにも、用い馴れがある。

○敬つて云い、丁寧に云い、又わ、言葉をうつくしく云うに用いるもの、熟語となつて名詞となる。

【六一五】「さま」（樣）

太神宮さま、お太陽（てん）さま、有栖川さま、阿彌陀さま、佛さま、太閤さま、

ま、殿さま、奥さま、お姫さま、お祖父（じい）さま、母さま、人さま、今日

さま、　あなたさま、　どなたさま、　いづれもさま、　御存(ごぞんじ)さま、
お蔭さま、　お世話さま、　お氣の毒さま、　おあいにくさま、　お匆々さま、
御機嫌さま、　御馳走さま、　いかゞさま、

「さん」（樣）

お祖母(ばあ)さん、　お姑さん、　叔父さん、　兄さん、　お孃さん、　お子さん、
齋藤さん、　太郎さん、　お花さん、　あなたさん、　おまえさん、

【六一九】「どの」（殿）

大臣どの、　近衞どの、　知事どの、　大尉どの、　佐藤太郎どの、

「どん」（殿）

村長どん、　番頭どん、　小僧どん、　清吉どん、　お竹どん、

【六一一】「くん」（君）

高橋くん、　田中くん、　太郎くん、　次郎くん、

「せんせい」（先生）

惺窩せんせい、　白石せんせい、　本居せんせい、　教授せんせい、

右の内で「さま」わ、人、其外、種々の語に用い、「さん」以下わ、重に人に用いる「さん」

わ「さま」の崩れたもので、同輩までにも用い、「どの」わ、嚴(いかめ)しく敬つて云うに用い、「どの」以下わ、代名詞に用いない、「どん」わ、「どの」の崩れたもので、同輩に用いて、「さん」よりわ下り、多くわ、雇人どしなど、互に用いる、「くん」わ、學者書生などの間で、男子の同輩に用い、「せんせい」わ、學者師匠を敬つて呼ぶに用いる。

○目上の親族を敬つて呼ぶに、「父うえ」母うえ」叔父うえ」叔母うえ」兄うえ」姉うえ」など云う「うえ」(上)があり、他人の親族を少し敬つて云うに、「親ご」母ご」叔父ご」叔母ご」兄ご」姉ご」嫂ご」弟ご」娘ご」娣ご」姪ご」など云う「ご」(御)があるが、用いる所が狹い、稍下つて、己が叔父、兄を「叔父き」兄き」と云う「き」(君(きみ)の略であろう)もあるが、用いる所が、最も狹い、又、稀に、苗氏の下に「うじ」(氏)と云う語を附けて、同輩に用いることもある。

天子、皇后、皇太后に「陛下」、皇族に「殿下」、高位高官の人に「閣下」と申すもある、是等わ、又代名詞として、稱し上げることがある。

○「さま」わ、方(かた)の意、「こなたざま」横・さま」逆(さか)さま」有明(あけ)さま」行きちがひさま」東ざま」南ざま」など云う「さま」で、貴人を、直ちに指して云うを憚つて、其居る方で稱したものから、終に尊稱となつたのである。

【六一一】【六一九】 接尾辭 さん どの どん くん せんせい

義經記、八、はうぐはんじがいの事、御館(たち)も、かみさまも、しでの山と申路、こえさせ給ひて、」若君さま、御たちの御子と生れさせ給ふも、云々、

永享四年九月、足利將軍義教の、駿河へ下向の時、飛鳥井雅世の、隨身して書いた富士紀行に、公方樣富士御覽、

寶德の頃の中原康富記、禁裏樣、

狂言記、聟貫、父(ちち)樣、さうおつしやるは、合點でござる。同、花子、花子樣へ、お出でなされてござる。同、鹿狩、何がさて、おまへ樣さへ、もつてならしやれて下さるならば、

太田和泉守覺書、御くげしゆと、御じやうさまたち、ひきあはせ、云々、

「どの」わ「殿」で、貴人の家の稱、是れも、貴人を指して云うを憚つて、其居る所で云つて、尊稱としたもので、源氏物語の頃から、「關白どの」大納言殿」(夕顏)などゝある。

「ご」わ「御」の音で、本朝文粹の菅公の詩の注に、「俗謂貴女爲御、蓋取夫人女御(にようご)之義也」とあり、大和物語に「伊勢の御」、土佐日記に「淡路のご」、などゝあるから起つて、男子の「父ご兄ご」にも移つたのであろう、長門本平家物語、十に「是こそ

殿の父御下野殿の御首よ、」狂言記、七騎落に、「父御下りさせ給ふならば、某、船よりも下り申さん。」などゝ見える。

○人を罵り呼び、又自分を卑下して云うもの、名詞となる。

「め」(奴)

鈴木め、清助め、小僧め、百姓め、畜生め、よわむしめ、私め、

「め」わ、姓氏錄、大伴宿禰の條に、「大來目部、」日本書紀、履仲紀元年に、「阿曇目」などある「べ」「め」で、部の約轉で、等の意から、遂に、罵る意になつたのであろう。

平家物語、二、西光切られの事、憎ひ入道めが、何事をか奏聞すべかんなる。

源平盛衰記、廿九、俱梨伽羅山、其信救メ、イカニモシテ打殺セヨ。

義經記、關東よりくわんじゆばうをめさるゝ事、すぐやかならん小とねりめらに仰付て、

幸若、富樫、武藏め一人、戸樫が館に移りて、城のけごを見損じたらば、云々、

狂言記、花子、太郎冠者、「花子樣へお出でなされてござる」、女房、「え腹立や腹立や、おのれまでが、樣と云ふか、め」といへいやいゝ。(花子は、主人の隱し妻、) 同、長光、あの横着者めが、

接尾辭め

○人の複數なのを云うもの、名詞となる。

【六〇八】「がた」（方）

大臣がた、お大名がた、御婦人がた、皆さまがた、あの人がた、

【六一七】「たち」（達）

役人たち、親たち、友だち、君たち、おまえさんたち、私たち、おまえたち、

「しゆ」「しう」（衆）

公家しゆ、檀那しゆ、子供しゆ、若いしゆ、女中しゆ、役人しう、年寄しう、友だちしう、

右の内で、「がた」わ、敬い云うに用い、「たち」わ、敬うにも、同輩、自分、又わ、目下にも用い、（萬葉集、十九、「此吾子を、唐國へやる、齋へ神多智。」）「しゆ」「しう」わ少し敬う心がある。

又、稀に、「女ばら」奴ばら」百姓ばら」なども云う「ばら」（儕）があつて、卑めて云うに用いる、是わ、大和物語に、「うかれめばらの申すやう、」源氏物語、夢浮橋に、「弟子ばらの中に、驗あるものどもを呼びよせ、」枕草紙、八に、「女院、宮ばらの屋、あま

たあるに、」同、十一、「關白、その御次に、殿ばら‖おはするかぎり、」などゝ、古くは、貴いにも賤しいにも用いてある。

又「學者連‖」書生連‖」御婦人連‖」娘連‖」など、「れん」と云うのもある。是れわ、通例の複數である。

以上の內に、單數に用いるのもある、「友だち」などわ、多くの場合に、單數に用いる。

○人、又わ、物事の複數なのを云い、又、物事を廣く指して云うもの、名詞となる。

【六二〇】「ども」（共）

家族ども‖、親類ども‖、男ども‖、子ども‖、小僧ども‖、自分ども‖、あの者ども‖、

土產ども‖、荷物ども‖、心配な事ども‖、

【六二四】「ら」（等）

鈴木、木村、高橋ら‖、おまえら‖、あの人ら‖、よわむしめら‖、

あすこら‖、どこら‖、今日（きょう）ら‖、幾ら‖、

「ども」ら」にわ、敬う意わない、そうして、單數に云うこともある、殊に、「子ども」など

【六〇八】……【六二四】接尾辭 がたたちしゆ しうどもら

む、多くわ單數に用いられる。

「ら」わ、物事の數ある限を列ねたのにも、其外にあるを含めたのにも云う。（これを、内等外等と云う。）

○互に仲間である意を云うもの、

「どし」「どうし」（同士）

仲間どし、男どし、女どし、讀まぬどし、書かぬどし、書生どうし、子供どうし、

○「どし」わ、文語の「どち」の變わつたものである。

○人と云う意のもの、

【六一八】「て」（手）

渡して、引受けて、抑えて、漕ぎて、見て、仕て、射て、

「備え」の意味の「水の手」「先手」「大手」「搦手」などわ、成語と見る。

○助詞の「四四三」「四八三」にも「て」がある。

○順番を云うもの、

「め」（目）

一つめ、二つめ、三度め、五年め、八番め、十枚め、幾つめ、

一つめ、二つめ、三度め、五年め、八番め、十枚め、幾つめ、
「一番」「十番」「幾番」「二等」「五等」「幾等」「三號」「十號」「百號」などもある、數詞の「七五」を見合せよ。
程合を云う「細目」「長目」「利き目」「控え目」「其處其時を云う「縫い目」「繼ぎ目」「割れ目」「分れ目」などわ、成語と見る。
○有樣を云うもの、
【六一四】「さ」（狀）
深さ、大きさ、かわゆさ、悲しさ、
あわれさ、綿密さ、愉快さ、不思議さ、
褒められたさ、言わせたさ、
「た」わ、希望の助動詞の「たい」の語根である。
○「三五九」の助詞にも「さ」がある。
○其氣味を云うもの、
【六一二】【六一三】「け」「げ」（氣）
寒け、眠（ねむ）け、怖（おじ）け、
【六一二】・【六一八】接尾辭　どし　どうしてめさけけ

きたなげ、卑しげ、物欲しげ、
雨げ、雪げ、大人(おとな)げ、迷惑げ、
○性質を云うもの、

【六二二】「み」

赤み、厚み、弱み、深み、旨(うま)み、悽(すご)み、憎(にく)しみ、
○以上、皆、熟語となつて、名詞となる。
右の外に、容子を云う「顔付」手付」事のついでの意を云う「歸りがけ」起きがけ」事の起る時を云う「寢しな」行きしな」(醒睡笑、五、「いきしなに、つぼふだ花が、きしなには、ゑじかつたりや、桶とぢの花。」事の成つた初を云う「出來たて」煮たて」ある限りを盡す意を云う「金盡(づく)」腕盡」義理盡」などわ、成語と見る。
○そのように思われると云う意のもの、

【六一六】「そう」(狀)

「だ」で「です」に」な」なら」なり」も」は」などを履む、助詞の「四四一」にも、「そう」がある、其語原、用法、區別などわ、其所に說いてある。
行きそう。出來そう。まるりそう。迷いそう。
である。まるりそうです。迷いそうもない筈だ。

痛そう。嬉しそう。面白そう。何も無さそう。
に思われる。
に笑う。
な顔、
だ。

痛そうに思われる。　面白そうに笑う。　嬉しそうな顔、　何も無さそうだ。
好さそうな話、
聞かれそうなら返答しろ。　勝たれそうわない。　讀ませそうだ。　旨く出
來なそうだ。　行きたそうにして居る。　食べたそうな容子、
「そう」を、形容詞の「無い」好い」の語根の「な」よ」に附ける時わ「さ」を加えて「なさそ
う」よさそう」と云うと云うことわ、「一五一」に云つておいた。
「行きたそう」食べたそう」などの「た」わ、希望の助動詞の「たい」の語根である。
「物あわれそうに泣いて居る。」などわ、名詞に附き、「澤山そうに云う。」大膽そう
な顔、不思議そうに思つて居る。」大切そうに持つ。」旅行わ難儀そうだ。」などわ、
漢語に附き、「穏やかそうな世の中、」酒盛が賑やかそうである。」などわ、副詞の
語根に附く。

室町時代

幸若、烏帽子折、　何よりも、やすさうなる事にて候。　同、富樫、　葦毛なる駒
の蹄、堅さうで、如何に驅足のはやからん。
史記抄七、一九　牛酒ガ足サウモナイゾ。　同、九、四三　年代ナンドハ、サノ

【六一六】【六二二】接尾辭　み　そう

ミ、チガイサウハナイ事デアル。

孟子抄一、四　陵遲ハ、ヲカノ次第崩レニシテ、平地ニナリサウナヲ云ゾ、ヲトロフル體ゾ。　同、十二、二五　此樣ニ、肩ヲ双ル者モナク、余所カラトラレ(受身)サウモ無レバ、必、驕テ亡ルゾ。

狂言記、柿山伏、　柿、云々、これは、ちと澁さうな。鳶、云々、もはや飛びさうなものぢやが、　同、苞山伏、　こゝに、涼しさうな所がござる。　同、丼磴(どぶかつちり)、　殊の外、物淋しうなつたが、是れは、野はづれ(名詞)さうな。

江戸時代

清正高麗陣覺書、　大名衆え之御對面、延引仕そうに御座候。

太閤記、四、　又左衞門も、あらこなし仕そうなる者を、二千五六百撰み、

醒睡笑、一、　薪をかひ、庭なる棚につませけるが、なにとやらん、くづれそうなり。　同、四、　途中に、ひとりの姥、やすらひ、物あはれ(名詞)さうになきゐたり。　同、六、　海老、云々、宮川で見た、色が赤かうて、見事にあつた、海老は、海にある物なり、生得、色はあをくろし、云々、うそ(名詞)さうな。

油糟、雜、　くひあひて、術なさう成、みぞいたち。

正章千句、一、　涼しさうなる、佐保の河波、　同、二、　降りさうな、雲こそたて

正章千句、一、　涼しさうなる、佐保の河波、　同、二、　降りさうな、雲こそたてれ、露しぐれ。

吾吟我集、二、　まだ落さうも、なき小姫瓜。

小栗の判官、一、　なさぬ中のざんにより、身の置所なきまゝに、是迄參り候と、げにありそふにぞ申ける。

古今夷曲集、一、　膩そうで、奇麗なものは、歌人の、口にかゝれる、山のは霞。」梅がえは、そなたのえてむ、樂(越天樂、漢語)そうに、口笛なるか、やよや鶯。」まとひつゝ、藤にしたゝか、締られて、難儀(漢語)そうなる、松ふぐりかな。　同、二、枯そうな、富士なでしこを、育てんと、水汲かくる、たごのうらが身。　同、九、座當めが、むづかしさうに、お茶臼を、引のこくのと、强まはるかな。

後撰夷曲集、九、　山城の、木幡の里に、むまさうな、しんこはあれど、かちんをぞかふ。

○一面に塗(まみ)れた意を云う「血だらけ」泥だらけ」灰だらけ」など云うのがある、用法わ、此「そう」に似て居る、しかし用いる所わ狹い。

○其樣子になる意を云うもの、是から、次々のものわ、熟語となつて、動詞となる。

接尾辭　み　そう　だらけ

る。

【六二三】「めく」　五段活用、

時めく、　唐めく、　子供めく、　商人めく、　役人めく、

○是れと同じ意味で、「古び(ふる)る」田舍びる」大人(おとな)びる」氣違じみる」隱居じみる」(上一段活用)などもあるが、用いる所が狹い。

○殊更に其樣子をする、又其風を眞似る意を云うもの

「めかす」　五段活用、

才子めかす、　學者めかす、　通人めかす、　教師めかす、　役人めかす、

【六二一】「ぶる」　五段活用、

學者ぶる、　上品ぶる、　容體ぶる、　勿體ぶる、

○其樣に思うと云う意味のもの、

【六一〇】「がる」　五段活用、

痒がる、　寒がる、　かわゆがる、　せつながる、　ねむたがる、　けむたがる、

嬉しがる、　ゆかしがる、　恥かしがる、　欲しがる、　聞きたがる、　見たがる、

あわれがる、いやがる、窮屈がる、無念がる、殘念がる、億劫がる、

○「ねむたがる」けむたがる」わ、「ねむたい」けむたい」の語根に附いたもので、「聞きたがる」見たがる」わ、希望の助動詞の「たい」の語根に附いたものである。

土佐日記、追風の、吹きぬる時は、行舟の、ほでうちてこそ、嬉しがりけれ。

孟子抄、一、一四　國ヲモッタ者ハ、人ノ國ヲ取タガリ、同、三、三一　稅ヲ取ラネバ、天下ノ農夫ハ嬉シガルゾ。同、六、一三　東國ヲ成敗セラルレバ、西國ノ民ガ羨シガルゾ。同、七、九　ソレヲイヤガラバ、道ヲバナゼ行ハヌゾ。

閑吟集、いとおしがられて、あとにねうより、にくまれ申て、おそくねう。

狂言記、宗論、身にも笠にもつくやうにいやがるわ。同、柿山伏、柿、云々、

鳶烏もつきたがる程に、油斷のならぬ事でござる。同、吟賀、罷出でたるは、舅にかあいがらるゝ花聟でござる。

後撰夷曲集、三、遠目にて、鹿見付しも、逃ぬれば、すつかり人ぞ、無念がりける。

又、其樣になつた心持で居ると云う意味に用いることがある。

【六一〇】【六二二】【六二三】接尾辭　めく　ぶる　がる

才子がる、上品がる、通人がる、得意がる、

○出來難い意味を云うもの、

「かねる」下一段活用、

行きかねる、取りかねる、爲かねる、出來かねる、

○推量する意を云うもの、是から次々のものわ、熟語となつて、形容詞となる。

【六二五】「らしい」形容詞第二種活用、

豐年らしい、ほんとうらしい、

穩やからしい、ことさらしい、わざとらしい、

又、其樣子であり、其直打があると云う意味に用いることがある。

女らしい、子供らしい、學者らしい、

「らしい」わ、推量の助動詞にもあつて、それわ、活用が缺けて居ると云うことわ、其所に說いておいた、此接尾辭の「らしい」わ、「らしかろう」「らしければ」「らしくば」「らしくて」などゝ、全く、第二種の形容詞と同じように活用する。

「愛らしい」珍らしい」かわゆらしい」しおらしい」憎らしい」いやらしい」いじらしい」長たらしい」すばらしい」しかつめらしい」などわ、全くの形容詞で、

推量のものでわない。

「らしい」と云う語の、昔からの遷りかわりや例わ、推量の助動詞の「らしい」の處に記しておいた、見合わせるがよい。

史記抄、十、四二　人ノ怨ト云モノ、毒ラシイハ甚シイ事ゾ。　同、十、五二

始カラ祿ヲ干メバ、ナニカバカラシイ事ハアラウゾ。

狂言記、花子、　言葉、尋常に匂ひなどして、情らしう云てくるゝに因て、云々、

○そうと疑われる意味を云うもの、

【六〇九】「がましい」　形容詞第二種活用、

隔てがましい、　人がましい、　勝手がましい、

嘲弄がましい、　無禮がましい、　追從がましい、　議論がましい、　烏滸がましい、

○出來難い意味を云うもの、

「にくい」　形容詞第一種活用、

讀みにくい、　行きにくい、　爲にくい、　受けにくい、

○其外に、其樣に見える意味の「古めかしい」今めかしい」商人めかしい」など、ま

【六〇九】【六二五】　接尾辭　かねる　らしい　がましい　にくい

4N-5
1-088
Ko.47
2B

4N-5
-088
Ko 47

だあるが、どれも用いる所が狹い。

口語法別記 終

大田文庫

255

国立国語研究所
1000068955

文部省著作權所有

大正六年四月二十五日印刷
大正六年四月二十八日發行

口語法別記
定價金六拾五錢

著作者　文部省
發行者　東京市日本橋區新右衞門町十六番地　株式會社國定教科書共同販賣所
右代表者　大橋新太郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市日本橋區新右衞門町　株式會社國定教科書共同販賣所